

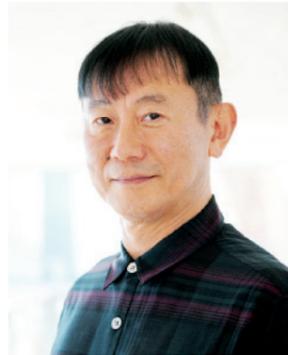
和光大学
地域連携研究センター
2022年度 報告集

第2号

THE ACTIVITIES
REPORT OF
WAKO CENTER FOR
COMMUNITY OUTREACH



報告集に寄せて



地域連携研究センター長
倉方 雅行

2年間の任期もあっという間に過ぎようとしています。その間デザインが専門分野である私の取り組み目標は、組織内の「オペレーション・テンプレート」を構築することでした。様々なアイデアの学内のプロジェクトや外部からの支援・協力への対応、関係部署への依頼や告知など、煩雑になる内容が多い中でそれらをどのように取りまとめるか？例えば、担当者が一時不在でも情報伝達が途切れないように、「個」対応から「組織」対応への仕組みや、イベントなどの開催が時期と場所でそれぞれが単独に見えるものを、俯瞰して全体が分かるように告知する方法など。またプログラム申込書や報告書の書式すら、最終的に報告集として編集する際に、筆者も編集者も分かりやすくするなどの、仕組みの取りまとめ、すなわち「コトのデザイン」に取り組んできました。まだまだ完成品にまでは至っていませんが、それをこれからアップデートしていくことで、より一層地域との連携に役立てて頂けたらと思っております。また、任期中に色々とお世話になった皆様方におかれましては、この場をお借りして、お礼を申し上げますと同時に、これからもセンターへのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

目次

🌐…社会連携研究プロジェクト 🔗…地域応援プロジェクト

- ・現代人間学部 心理教育学科 高坂康雅 教授 🌐 …… 2ページ
- ・現代人間学部 心理教育学科 後藤紀子 准教授 🔗 …… 3ページ
- ・表現学部 芸術学科 倉方雅行 教授 🔗 …… 4・5ページ
- ・表現学部 芸術学科 半田滋男 教授 🌐 …… 6ページ
- ・経済経営学部 経済学科 加藤巖 教授 🔗 …… 7・8ページ
- ・経済経営学部 経営学科 小林猛久 教授 🌐 …… 9ページ
- ・経済経営学部 経営学科 バンバン・ルディアント 教授 🔗 …… 10ページ
- ・社会連携フォーラム（大学開放、ジェンダー、地域・流域共生）の紹介 …… 11ページ
- ・さまざまな地域連携活動 …… 12・13ページ

*掲載している情報は、2024年2月現在のものです。

▶ 地域連携研究センターとは

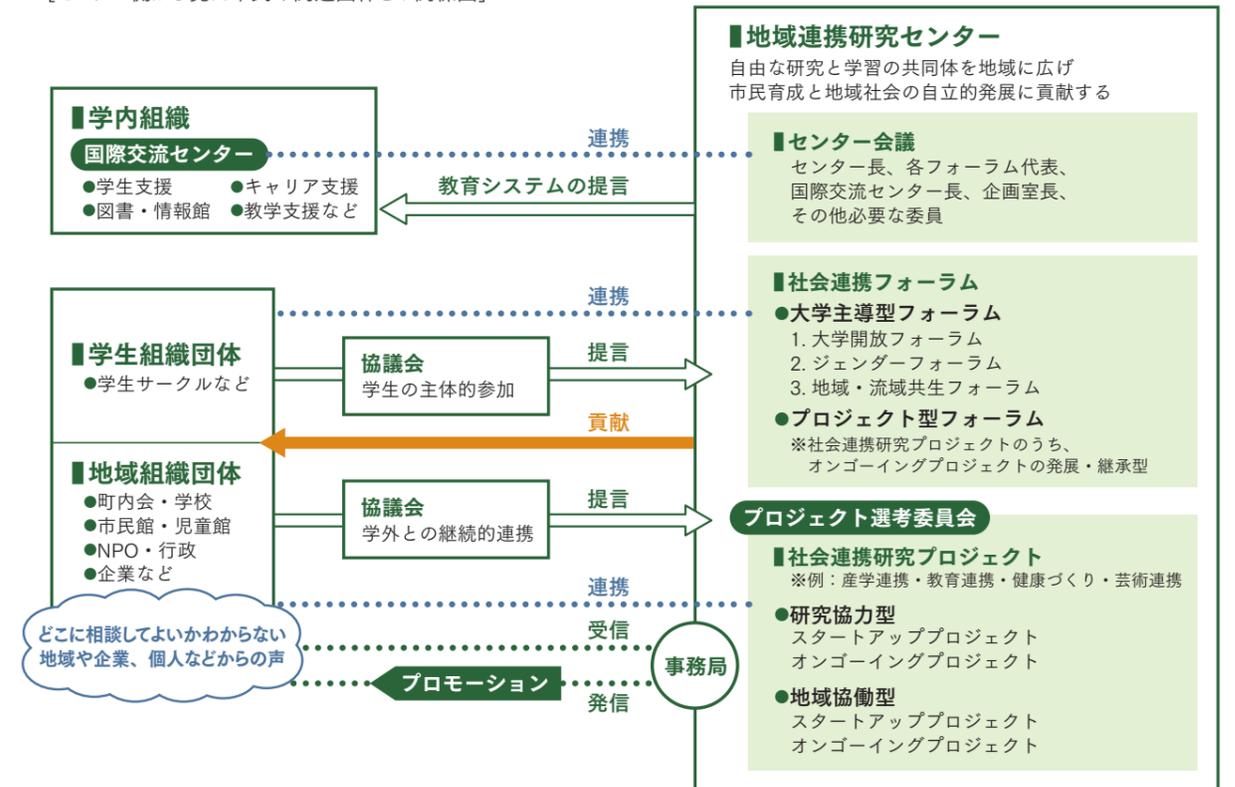
和光大学は、開学当時から開かれた大学として、教職員・学生が一体となって地域社会と連携した活動を行ってきました。こうした活動は社会的にも高い評価を得ており、地域からのニーズも多くあります。地域連携研究センター（以下、センター）は、これまでの実績を基盤として、社会貢献・教育・研究が一体となった活動を一層推進していくための機関として2016年4月1日に開設されました。センターは、学外からワン・ストップでアクセスできる窓口を設けており、地方自治体や民間企業、NPO等各種団体並びに地域住民など、地域を構成する方々からの要望を大学の教育研究活動につなぐ役割を果たしています。また、生涯学習や文化交流、街作りなどで、地域に貢献している本学の学生、教職員たちが継続的に活動できるよう、積極的にバックアップを行っています。センターは、センター会議と社会連携フォーラムおよびプロジェクトにより構成され、それぞれの役割に応じた活動を展開しています。

▶ 社会連携研究プロジェクト・地域応援プロジェクトについて

- 🌐 社会連携研究プロジェクトは、本学の学術的な蓄積や教職員・学生の力を活用して、地域と連携・協働しながら、地域が抱える課題やニーズに対して、その解決や新たな方向性を模索するために取り組むプロジェクトです。本学の専任教員が、個人もしくは共同で行う調査・研究を対象としており、「その調査・研究結果が、和光大学が立地する周辺地域及び研究対象の地域に還元され、ひいては、それらの地域の発展や活性化に寄与していくものであること」が認められる場合、大学として当該研究に対して資金的援助を行います。
- 🔗 地域応援プロジェクトは、本学教員による研究活動を主体とする社会連携研究プロジェクトと異なり、地域が抱える課題やニーズに対して、その解決や新たな方向性を模索するため、単発もしくは連続で開催される講演やセミナー、ワークショップ等、本学教職員・学生が主催する催し物に対して、大学として資金的援助を行う制度です。

地域連携研究センター インナーイメージ

[センター側から見た市民や関連団体との関係図]





01

大学を中心とした 地域の不登校支援ネットワークの 構築



代表教員
高坂 康雅

現代人間学部 心理教育学科 教授

研究分野
青年心理学
(特に青年の自我発達、恋愛、友人関係)

プロジェクトの概要

本プロジェクトは、適応支援室「いぐお〜る」の運営と町田市不登校の親の会「いぐぶらす」の開催を通して、不登校児童生徒とその保護者に対する支援について検討していくとともに、学校・医療機関・フリースクールなどとの連携を深め、地域における連携・協力を行うためのネットワークを構築することを目的としている。

①適応支援室「いぐお〜る」の運営

2022年4月11日(月)より毎週月・火曜日の週2回、9時30分から15時30分の6時間、適応支援室「いぐお〜る」を開室し、地域の不登校児童生徒10名程度の支援及び保護者・関係者等への助言を行った。

②町田市不登校の親の会「いぐぶらす」の開催

2023年1月21日(土)にぽっぽ町田にて開催し、不登校の子をもつ親が15名程度参加し、交流・情報交換を行った。

※当初予定では2022年度に4回開催予定であったが、コロナ禍のため1回の開催にとどまった。

※町田市不登校を学ぶ会「いぐあるふぁ」は開催できなかった。

③町田市教育委員会フリースクール等連絡会への参加

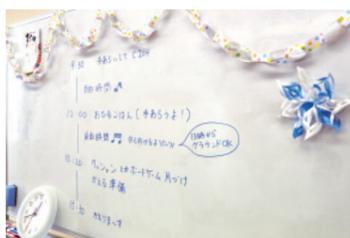
2022年11月30日(水)・2023年3月24日(金)に町田市教育委員会で行われたフリースクール等連絡会に参加し、適応支援室「いぐお〜る」の活動などについて紹介するとともに、他のフリースクール等の代表者・スタッフなどと懇談を行った。

研究成果の概要

本プロジェクトの2022年度の主な活動は適応支援室「いぐお〜る」の開室と、町田市不登校の親の会「いぐぶらす」の開催であった。適応支援室「いぐお〜る」は2022年度も週2回の開室となり、月曜日5名、火曜日5名の不登校児童生徒を受け入れ、大学生・大学院生スタッフとの交流を通じた活動を行った。継続して開室することで、不登校児童生徒の居場所として機能し、対人コミュニケーションや適応に関して一定の支援が行えた。同時に、保護者に対しても継続的な面談を行い、通室生のアセスメントやそれをもとにした助言等も行った。適応支援室「いぐお〜る」は、不登校支援の重要な資源として、町田市のなかでも認知されてきている。町田市教育委員会のスクールソーシャルワーカー(SSW)や各学校に配置されているスクールカウンセラー(SC)からの紹介も多く、また多摩市、横浜市などからも通室・問い合わせ等がある。これらから、現在の活動を継続することが不登校状態・傾向の児童生徒とその保護者、学校、地域においても求められていると考えられる。また、町田市教育委員会によるフリースクール等連絡会に参加し、適応支援室「いぐお〜る」の活動を紹介した。町田市の不登校の現状や不登校支援のあり方などについて意見交換を行い、他のフリースクールの活動を把握できたので、今後の適応支援室「いぐお〜る」の活動に活かしていく。



いぐお〜る運営の様子



02

親子de楽しむ ふれあいタイム



代表教員
後藤 紀子

現代人間学部 心理教育学科 准教授

研究分野
幼児の音楽
幼児の表現

プロジェクトの概要

後藤ゼミ(保育表現演習)は、『わっこ』という名を冠して地域の親子向けに「親子ふれあいあそび」「パネルシアター」「影絵」「ブラックシアター」「ベルの演奏」などのパフォーマンスを行ってきた。

保育士・幼稚園教員を目指す学生にとっては、子どもの前で表現をするためには何が大切かを考えることが重要である。そのために、人形劇、パネルシアター、あそび歌などの演じる力をつけ、子どもたちの前で実践することによって、子どもたちが引き込まれていく様子を実際に感じ取り、演者としての自覚と成長を促す。

ゼミの取り組みではあるが、毎年参加者から好評を得ており、地域への貢献活動としても位置づいている。また、地域に住む親子に、本学に保育コースがあることを認知してもらい意義は大きい。

2022年は3年ぶりに和光大学ポプリホール鶴川での対面公演となり、感染予防のため客数も減らしての開催となった。

研究成果の概要

開催日：2022年11月13日(日) 10:30~11:30

会場：和光大学 ポプリホール鶴川

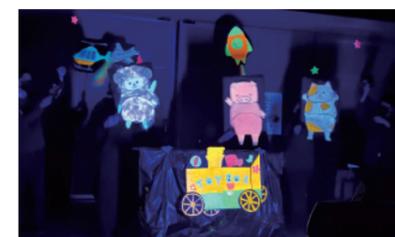
3年ぶりの対面公演となり、学生たちは3年生4年生とも初体験となった。

司会進行は、お姉さんとパペット「わっこくん」である。演目は、以下のとおりである。

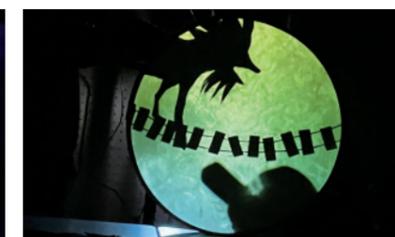
- 1.わっこのうた(出演者のパフォーマンス)
- 2.親子でふれあいあそび「バスに乗ってゆられている」【おふねはぎつちらこ】
- 3.パネルシアター「森のアイスクリーム屋さん」
- 4.ベル・トーンチャイム「さんぽ」「きらきら星」参加者と一緒に演奏
- 5.影絵「三びきのやぎのらがらどん」
- 6.ブラックシアター「おもちゃのチャチャチャ」
- 7.スカーフ遊び(ブラックライト)「ふりふりスカーフちゃん」「上から下から」
- 8.わっこのうた(出演者のパフォーマンス)

参加者のアンケート結果によると、概ね楽しめたとの回答が多かった。

主に3年生が中心に各演目を取り仕切っていく、4年生はサポートを行った。兄弟がいる参加者は、保護者の代わりに子どもを膝の上に載せ一緒に楽しむ姿が見られた。参加者からの応答もあり、子ども達と会話のキャッチボールをしながら進めていくことができた。シアターものも楽しく観てもらったが、ベル・トーンチャイムのコーナーとスカーフ遊びのコーナーでは、子ども達がメインで活動していくことで子どもたちの元気な姿や笑顔が見られた。これらの時間をもう少しゆっくり取れるとよいと感じ、次回の課題としたい。



ブラックシアター「おもちゃのチャチャチャ」



影絵「三びきのやぎのらがらどん」



パネルシアター「森のアイスクリーム屋さん」



学生たちの様子



03

町田市バイオエネルギーセンター 施設紹介イベント

代表教員
倉方 雅行

表現学部 芸術学科 教授

研究分野
インダストリアルデザイン
プロダクトデザイン
コミュニティデザイン

プロジェクト所属メンバー
●角尾宣信
総合文化学科 講師

プロジェクトの概要

町田市から『町田市バイオエネルギーセンター*』の管理を依頼された株式会社タクマテクノス（港区、上村直也代表取締役社長）より、株式会社カンガルーズ（町田市、齋藤み代表取締役社長）が「環境学習やワークショップ」をテーマにした事業を受託した。その提案ポイントの中で「市民のニーズを理解する市内の団体・大学と連携」があり、以前からプロジェクトで交流があった本学の私と桜美林大学助教の金井玲奈先生に声が掛かり、学生と共にこのプロジェクトに参加することになった。

研究成果の概要

3R**の啓蒙事業を軸に株式会社カンガルーズと計画運営を行い、施設の紹介、市民間や学生同士、市民と学生の交流などを主に、催し物では廃材やリサイクル素材などを活用することを心がけた。日常での営みの中にSDGsが隠れていることを実感できる仕掛けを盛り込み、2022年度は春・夏・秋の3回を実施したが、始動時期の関係から、企画運営としては2回目の夏以降の参加になった。

夏の体験では、廃棄された竹を利用して「竹ぼっくり」と「水鉄砲」の製作と実演体験。秋には身の回りの物から緊急用具の制作を試み、Tシャツと長い棒を利用した簡易担架作りと、古新聞と段ボールを使用した瓦礫の上でも歩行可能な簡易スリッパ作りを行った。完成後には、実際に参加者に体験していただいたところ、その高性能な意外性に驚きを隠せない様子であった。

大人への3R啓蒙ではなく、幼児からの遊びを通じた啓蒙活動という点で、このプロジェクトの特筆すべき点は、株式会社カンガルーズのグループ法人である学校法人正和学園が一時保育を実施することで、未就学児を持つ家庭でも参加しやすくなった事である。それにより幼児・児童向けのプログラムへの参加が容易になり、ほぼ毎回300名を越す来場者に恵まれた。

町田市も2022年度の実績を評価して下さったことで、2023年度も継続開催となった。運営母体の株式会社カンガルーズから桜美林大学と本学がともに参加を求められている。

*町田市バイオエネルギーセンター：2022年1月に稼働を開始した、生ごみのバイオガス化施設とごみ焼却施設を一体的に整備した首都圏初の施設。

**3Rは Reduce（リデュース）、Reuse（リユース）、Recycle（リサイクル）の3つのRの総称で現実的に環境問題を改善するためにその考え方が広まり、我国では環境省を主に取り組みが進められている。



夏フライヤー

秋フライヤー



エコ素材チョークでお絵描き



簡易担架で運搬体験



施設職員のうちまちゃん&ゆうちゃんによる
ゴミ収集車実演



消火器の使い方体験

04

農業剪定廃材配合資材による 幼児向け食器トレー試作開発 (継続プロジェクト)



代表教員
倉方 雅行

表現学部 芸術学科 教授

研究分野
インダストリアルデザイン
プロダクトデザイン
コミュニティデザイン

プロジェクトの概要

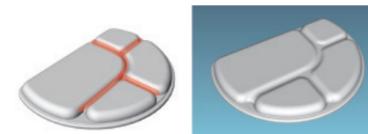
川崎市内の農業生産法人が、地元岡上地区の竹や剪定枝の廃材に注目し、それらの継続的な有効利用を目指すことで、2020年度、川崎市の助成金を受け、川崎市内のバイオマスプラスチック原材料を製造するメーカーと保育・プロダクトデザイン・経営の研究分野のある本学とが連携して、幼児向け食器トレーのデザインに取り組んだ。その成果を発展させて継続研究とした。

研究成果の概要

2021年度に未就学児への実証実験を行った過程で、幼児施設によって食育の教育方針や取り扱いの違いがあることから、食器の形状の微修正や新規仕様のアイデア創出をする必要があると考え、リサーチ意見の反映と使用者年齢層の拡大を図るために、以下の項目の研究を追加し、C案と新C案を進めるという結論を出した。

・裏面洗浄性向上のための試作型の修正

関係部署と検証を行った結果、裏面と表面の面形状の違いから、偏肉が発生し形状管理に問題が生じるであろう事が分かった。成形時間を長くする方法も考えられるが、製造コストへの影響も考慮すると適当とは思えず、著しい短所とも言えないことから試作型の修正は行わないこととした。



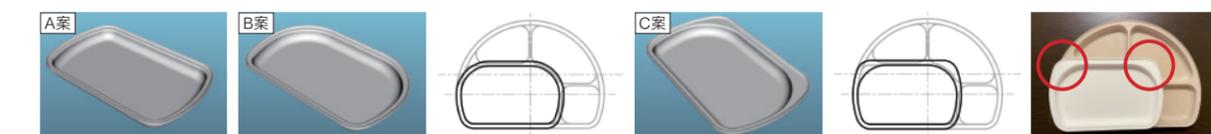
・量産による資材供給へのリスクヘッジ

施設などの公共の場での使用時には家庭用とは違い、製品の大口需要が見込めることから、原材料の安定供給を考えると、季節によって量のばらつきのある剪定枝よりも竹を主に考えた方が良いこともわかってきた。

・小皿などの周辺製品のアイデア創出

食事からおやつまでの一貫した食育の視点から、アレルギーのある使用者（特に子供）は、食事の時に別メニューで対応するため、せめておやつ時には同じものを同じように他のお友達と共通にするという観点で、おやつ小皿は重要との意見があった。

3Dのデータでの検討スケッチを元に、関係部署と打ち合わせた結果、前述のB、C案を立体検証し、C案を進めることにした。



B、C案でハンドリングの検証をした印象では、配膳の時C案の○印が持ち手として利用できることが分かり、実際に3Dモデルに食品を入れて実証実験を試みたところ、このサイズはおやつ以上に食事にも使える大きさである事が分かり、おやつ用のより小さいサイズのアイデア展開を行った。



形状のコンセプトは前述のC案を踏襲して、全体幅の半分で、おやつ用に特化した小さな物にした。

2021年のトレーの実証実験でも見られた「犬食い」が、小さなトレーの場合に手に持てる軽さになった時にどうなるのかという点に興味があり、今回の実験食材を固形物と液体が混在するゼリーにした。トレーを手にとって口に運ぶ仕草が予想されたが、口に接するところの選択が、Bを選んだことは予想していなかった。実験後被験者に尋ねると、Bの方が飲みやすかったからの回答であった。



05

和光大学と
地域社会におけるアート代表教員
半田 滋男

表現学部 芸術学科 教授

研究分野

現代美術
美術館学

プロジェクト所属メンバー

- 倉方雅行 芸術学科 教授
- 堂前雅史 人間科学科 教授
- 詫摩昭人 芸術学科 教授
- 小林猛久 経営学科 教授
- 平井宏典 経営学科 教授

プロジェクトの概要

2015年に始まったサトヤマアートサンポは川崎市麻生区黒川地域を拠点に6年間継続してきた。学生の作品を毎年、田んぼや竹林に展示するアートプロジェクトとして、地域住民の評判も良く、地域住民の方にも好評を得てきた。学生も日々努力をし、力作を展示し、学生自身の外界に向けた表現活動を意識させる教育機会にもなってきた。

2019年からは、場所を大学のある麻生区岡上地域に移し、2022年度はさらに岡上町内会と営農団地管理組合、セレサ川崎農業協同組合等の協力も得られ、規模を拡大して開催することができた。大学に密着している岡上を意識したアートプロジェクトを行うことで、より大学・学生・地域住民・行政にも、収穫が得られるプロジェクトを意図している。

研究成果の概要

サトヤマアートサンポ in 岡上2022：2022年11月12日（土）～11月23日（水・祝）

活動成果は展示自体によって地域に還元することにある。

コロナ禍では展示のエリアは岡上梨子ノ木緑地と大学敷地を中心においていたが、2022年度は地域全体に、ことに岡上を特徴づける営農団地に拡大し、全11作品を展示した。折しも麻生区区制40周年にあたったため、その記念事業の一端にも位置づけられることとなった。

展示期間には、これまでお世話になっている地域の住民のほかにも、従来付き合いのなかった地権者の方々、作業にいそむ住民、毎朝決まった時刻に散歩する住民、さらに地域外から岡上の風景を好んで散歩に訪れる人々などと会話を交わしたりする機会にめぐまれ、さまざまな見解を得ることができた。

また、地域連携の会議に参加することで、地域住民が抱える問題、地域が何を目指しているかなど、断片的ではあるがその一端を知ることができた。例えば、長期的には地域を回遊的な農業地域にする、後継者不足問題、など。それらに地域の教育機関である本学が、アートと言う視点からいかにかわってゆくか模索するヒントを得ることができた。

具体的な成果は、視覚芸術=視覚によるものであるため、年度末に刊行・配布した記録集に記載されている。記録集は、関係者、関係機関に配布する他、近辺では麻生市民館岡上分館、本学図書・情報館でも公開している。



芸術学科 卒業生 青山仁希



芸術学科 卒業生 渡邊碧



ヴィジュアルアートゼミナール

06

近隣地域の
児童向け国際理解教育代表教員
加藤 巖

経済経営学部 経済学科 教授

研究分野

開発経済学
国際経済学

プロジェクト所属メンバー

- 松田朋子 共同研究員

プロジェクトの概要

2007年から代表の加藤と研究協力者らは和光大学近隣の小中学校などで国際理解教育に取り組んできた。和光大学の留学生達が小中学校を訪問し、児童と一緒に各国料理を作り試食するなどした。これまでにスリランカ、ネパール、チベット、ベトナム、インドネシア、マレーシア、フィリピン、韓国、中国、モンゴルなどを取り上げた。授業の前後には児童の「調べ学習」も行われた。事後調査の結果からは、多くの児童が、学んだ料理を家庭でもう一度楽しむといったことも分かった。

2020年度以降はコロナ禍の影響で小中学校への訪問ができなくなったため、代替としてこれまでの活動をまとめた小冊子を作成・配布し、好評を得ている。

2022年は調理実習はできなかったが、対面授業が再開され、アジアの踊りや音楽を児童向けに紹介した。あわせて、和光大生の異文化体験などをまとめた小冊子も作成した。

研究成果の概要

2022年10月13日に町田市立金井小学校でインドネシアの文化や社会を紹介する特別授業を実施した。講師は和光大学教授のバンバン・ルディアント先生が務めた。

授業の冒頭でバンバン先生が英語で話し始めると、児童の間で緊張が走った。ところが突然、バンバン先生が流暢な日本語に切り替えて話し始めると、今度は児童たちから歓声が漏れ、大いに驚いた様子だった。児童たちにも、目の前にいる人物の外見だけで、その人が何者であるのかを判断してはならないと理解できたようだった。

授業では、インドネシア社会の紹介を聞いた後、児童たちはインドネシア語の簡単な挨拶などを学んだ。そして、児童たちは日本の美しい千代折り紙を使って、インドネシア流（ジャワ島）の紙飛行機を作成した。児童らは大歓声を上げながら、自らで作った紙飛行機を飛ばしていた。授業は笑いの絶えない雰囲気だった。

2022年12月8日と2023年1月12日には和光小学校でネパールの文化や社会を紹介する特別授業を実施した。講師は和光大学非常勤講師の岡本有子先生（ネパール民族舞踊家）が務めた。

授業では多くの現地写真を見てもらいながらネパールについて説明した。地理や食べ物、衣服を通じた日本との文化比較を行った。そして、ネパールの子どもの遊びの様子や、子どもたちが参加する祭の映像を見もらった。

様々な楽器の紹介もした。実際に持参した楽器たちに触れてもらってから、用意していたプロの演奏家たちの動画を見もらった。台所用品として刃を上に向けて食材を上から押して切る「押し切り包丁」も一本持参して、実際に大根を切って見せたりもした。また、ネパール先住民のライ族の伝統舞踊のワークショップを行った。踊りに出てくる様々な動物の動きや日常のひと場面の所作を質問しながら教授した。最後はみんな手繋いで一つの輪になって踊った。踊りも子ども達の遊びや祭りの動画も盛り上がった。



ネパールの紹介①



ネパールの紹介②





07

アジア・フェスタ in WAKO 2022



代表教員
加藤 巖
経済経営学部 経済学科 教授

研究分野
開発経済学
国際経済学

- プロジェクト所属メンバー
- 岩本陽児 人間科学科 教授
 - 岡本有子 共同研究員
 - バンバン・ルディアント 経営学科 教授
 - 関根秀樹 共同研究員

プロジェクトの概要

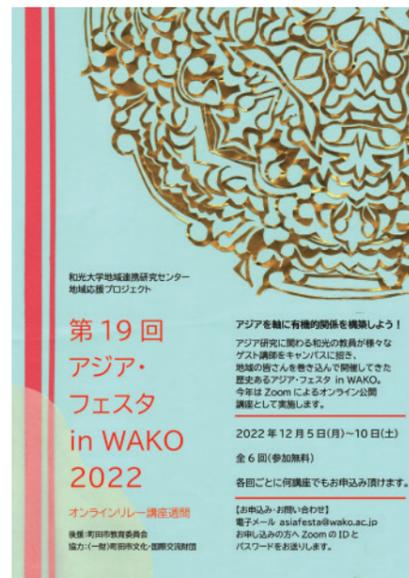
アジア・フェスタ in WAKO 2022が市民向けオンライン公開講座として開催された。同講座ではこれまで20年にわたり、アジア各地の暮らしや自然、歴史、食事、音楽、武術など多岐にわたる文物を地域の方々に紹介してきた。2021年からはコロナ禍の影響でオンライン開催となっている。2022年は6人の講師が6夜連続のリレー講義を行った。講師からはそれぞれ、日本国内の外国人コミュニティ、海外の砂漠化防止と屋久島の環境保全、ラマダンとその後の食事、沖縄音楽と近現代史、アジアの武術、ネパール伝統楽器についてお話をいただいた。企画やMCは岡本有子非常勤講師とバンバン・ルディアント教授が務めた。今回はオンラインの利点を生かし、海外（マレーシアとネパール）を含む遠隔地から講師を招くことができた。とくに、ネパールからは民族楽器の生演奏を中継できた。と同時に、受講者の方々も遠方から受講することができた。

研究成果の概要

アジア・フェスタ in WAKO 2022：2022年12月5日（月）～10日（土）

リレー講義（6夜連続）の様子は以下のとおり。

- 12月5日、室橋裕和さん（ジャーナリスト・作家）から北関東に広がる外国人コミュニティの様子をご報告いただいた。受講者全員が来るべき多文化共生社会を考えるきっかけを得た。
- 12月6日、野々山富雄さん（屋久島公認ガイド・環境教育インストラクター）から海外の砂漠化防止プロジェクトの体験や屋久島の自然環境保護について解説していただいた。
- 12月7日、松田朋子さん（マレーシア・サラワク州交響楽団ホルン奏者）からマレーシアのイスラム教徒が実践するラマダン（断食）とその後の祭事（ハリラヤ）を紹介していただいた。
- 12月8日、松村洋さん（和光大学元非常勤講師「アジアの生活文化論」）から戦後の沖縄が歩んだ厳しい年月と現在の姿を沖縄の音楽を通してお話していただいた。
- 12月9日、関根秀樹さん（武術家・和光大学非常勤講師）に琉球空手の源流の中国福建の鶴拳、さらにその淵源であるインド武術などを実践的に紹介していただいた。
- 12月10日、カドゥカ・バハドゥル・ブダさん（元ネパール国立劇団音楽ディレクター）からネパールの伝統楽器マーダール（両面太鼓）の魅力をご紹介いただいた。ライブ演奏もあり、全員が楽しんだ。



リレー講義① リレー講義② リレー講義③ リレー講義④ リレー講義⑤ リレー講義⑥



08

「地域デザイン」を基盤とした、次世代のための異質力育成プログラムの開発



代表教員
小林 猛久
経済経営学部 経営学科 教授

研究分野
ビジネスコミュニケーション
比較地域文化、ICT

- プロジェクト所属メンバー
- 倉方雅行 芸術学科 教授
 - 堂前雅史 人間科学科 教授
 - 岩本陽児 人間科学科 教授
 - 山田貢 共同研究員

プロジェクトの概要

4年制大学における学生の基礎的学力、学習意欲、コミュニケーション力の低下が叫ばれて久しい。大学生としての自己アイデンティティやキャリア意識、果てはモラルなどの低下が指摘され、高等教育の質すら問われ始めている昨今である。こうした状況を打開するためには、まずは学生の勉学意欲の喚起、そして自律的な学習、さらには社会性の涵養を可能とする大学と実社会との連携機能の充実に危機の課題となる。

これまでの成果として、2015年の共通教養科目「地域デザイン」新設、地域の農業生産法人との連携による社会と教育現場が融合した人材育成システムの構築や地域活性化へ貢献するシステムの構築、地域の特産品である禅寺丸柿を使った果実酒や万福寺人参を使ったエール（発泡酒）などの新商品の開発・生産・販売といった実体験型学習の実現などにより、学生の学習意欲の向上や地域経済の活性化の有効性を大きく示すとともに、結果的にその経験から地域企業に就職した学生もおり、地域に若者を根付かせる事例もなった。このように、事業の成果として地域活性化を実現するためには、地域に若者が定住し経済的に安定した生活を送ることができるシステムが必要となっている。しかし、単独の授業プログラムではその規模に限界があり、地域への影響力もそれほど大きくすることはできない。

そこで、本事業テーマとして設定した『「地域デザイン」を基盤とした、次世代のための異質力育成プログラムの開発』は、和光大学における現代人間学部・表現学部・経済経営学部の全3学部の学びのコアであるとともに本学の強みとなる「異質力で輝く」人材育成の実践的研究をベースとして、地域の多様な人々と連携活動を希望する全学生やあらゆる授業・課外活動をデータベース化により一元管理するとともに、本学の学生や教職員との連携により地域活性化を実現したいという企業や市民活動団体、各種行政機関との連携プロジェクト創出と運営やその評価を行うシステムを構築して、組織的かつ継続的に地域活性化を働きかけるものである。

研究成果の概要

これまでの本研究の取り組みにより、地域産業である農業の6次産業化への貢献、関連産業への学生の就職、履修者の増大などの具体的な成果を残すことができた。特にJAセレサ川崎 セレサモス麻生店では、2017年7月より岡上エールを常設販売して頂いているが、継続的に売上げがあり、「和光大学と地域の企業が共同して地元農産物を活用した商品の開発・販売を実現していることは地域経済の活性化に大いに役立つ。今後の量産化や多品種化を待っている」と大きな期待を寄せてくれている。また、2021年度から、和光大学生協において、ジャムや柿のドライフルーツの委託販売を継続している。

さらに、本活動の成果を踏まえて、2019年度からスタートした、寺子屋「おかがみ」事業（麻生区の取り組みとして、地元町内会やNPOなどが運営主体となって岡上小学校の児童の学習支援や体験活動を行う事業）の体験活動の支援が活発化し、SDGsをテーマとしたグリーンツーリズムとしての体験教室も根付いてきた。さらに、2022年度より、和光小学校（世田谷）の稲作支援をスタートさせ、6月のしろかきから10月の脱穀までの全作業をサポートするという連携を実現し、2023年度から継続して連携を行う契約を準備中である。また、川崎市と企業応援センターかわさきによる障がい者雇用支援についても本格的な共同作業として、全9回実施し、参加者数のべ30人を超えるなどの実績を残した。畑でのサツマイモ収穫、岡上エールのラベル切り取り、コメの袋詰めなど、実際に販売される商品の一部を担当する作業に従事することで、「達成感や緊張感を感じた」「他の企業での実習にも参加してみたいという意欲が生まれた」「学生との共同作業なので安心して取り組めた」などの前向きな感想を多数得ることができた。学生にとって多様な人々と共同作業することで、人の得手不得手に対応して業務を遂行する難しさや重要性を体験できたことは貴重な学びとなった。

コロナ禍の対策を徹底しながら継続することにより、今後も地域の小学生の支援を拡大するとともに、授業を基盤とした地域連携・人材育成プロジェクトを発展させ、全学的なシステムとして構築し、それを恒常化させることは、和光大学の地域貢献として大いに価値ある取り組みとなる。2023年度は、岡上地域の自然や歴史を調査して、各種史跡に関する紹介文を作成し、Webサイトで公開するプロジェクトを実施予定であるが、本活動内容は、長尾先生担当の「地域文化コミュニケーション」、堂前先生担当の「地域流域社会論」とも関連があるので、それぞれの活動内容について情報を交換して、各授業が連携した活動を行う可能性を模索する予定である。こうした複数の授業や教育プログラムが連携して、地域社会の人々と共同活動する取り組みは、和光大学としての組織的な地域貢献の基礎となりえると考えている。



リトルビエノ保育園さんから、とてもかわいくて、楽しいお礼状を頂きました。 大学生協で販売した柿のジャムとドライフルーツ 川崎の伝統野菜「万福寺人参」 寺子屋「おかがみ」事業の活動



09

ドキュメンタリー映画 『いまは むかし -父・ジャワ・幻のフィルム-』 の上映会と講演会



代表教員
バンバン・ルディアント

経済経営学部 経営学科 教授

研究分野
防災地理情報システム
リモートセンシング、国際協力

プロジェクト所属メンバー

●角尾宣信
総合文化学科 講師

プロジェクトの概要

本プロジェクトは、町田市がインドネシアのホストタウンに登録したことを機に、町田市から本学教員であるインドネシア出身のバンバン・ルディアントと連携の要望があり、実現したプロジェクトである。町田市と連携し、インドネシアに関わる映画の上映、監督の講演会を通して、その背景や文化を地域の方と学ぶ上映会を企画した。

映画『いまは むかし -父・ジャワ・幻のフィルム-』の監督である伊勢真一の父親・伊勢長之助（1912～1973）は、戦前・戦中・戦後を記録映画一筋に生きた映画編集者だった。戦時中のインドネシア（ジャワ）で父親が制作した国策映画を探るドキュメントを企画したのは、30年ほど前のこと。伊勢真一監督はインドネシアとオランダを数回訪れ、カメラを回し続けて20数年、上映作は、自主制作で取り組んできた映画である。「コロナ禍」、さらにロシアによるウクライナへの侵攻と、世界情勢が激変する中で、このドキュメンタリー映画の意味合いはとて深い。

研究成果の概要

開催日：2022年6月8日（水）
会場：和光大学ポブリホール鶴川
参加者数：132名

- ・上映前に上映会の企画主旨を説明し、主催・共催団体を紹介した。
- ・「いまはむかし」上映。（約1時間半）
- ・町田市副市長、町田市議会副議長が来賓。
- ・アフタートーク実施。角尾講師がモデレーターとなり、伊勢監督と当方が映画製作に至る経緯や背景について意見交換を行った。
- ・終了後、伊勢監督がロビーでサイン会を行い、来場者と交流を持った。
- ・20代から80代の幅広い年齢層の観客が来場し、すべての年代から「語られなかった歴史について知り得た」「平和の大切さを感じた」という感想が寄せられた。日本とインドネシア両国の歴史について知ることが、友好関係を継続する上で重要であるため、大変効果的であった。また、ロシアによるウクライナ侵攻により、戦争が身近に感じられる現在だからこそ、この映画を上映する意義があったと感じられた。
- ・和光大学の教員、インドネシア関連の市民団体が連携し、また町田市の財団からサポートを受け、町田市の地域活性化の一助となることができた。今後もこの連携の経験を活かしていきたい。



上映後の講演会の様子



伊勢監督とバンバン・角尾教員

和光大学を通じて地域に貢献する

社会連携フォーラム

和光大学の研究成果や人材などの提供を通して、地域に貢献することを目的に、地域連携研究センターの下に設置された機関です。
現在、大学開放フォーラム、ジェンダーフォーラム、地域・流域共生フォーラムがあります。

01 大学開放 フォーラム

和光大学の知的資産を広く地域社会に開放し、市民の方々に生涯学習の機会を提供することで、地域社会の知的活性化および文化の向上に寄与することを目的として設置されたフォーラムです。1995年にオープン・カレッジばいでいあを開設し、多くの市民の方々の知的好奇心を満たしているほか、単発の講座や、地域と連携したイベント等を行っています。

年度内の主な活動

- ・オープン・カレッジばいでいあ(生涯学習講座)開講 [対面/オンライン]

2022年

- ・6月10日、17日、24日 町田市共催講座「今、文化遺産が新しい一変わりゆく人・モノ・時間の関係性―」[対面]
- ・7月25日、26日 市民大学「オスカー・ワイルドの世界を探索する―その生涯と作品―」[対面]
- ・10月14日、21日、28日、11月4日 連続市民講座「日常と非日常をつなぐ美術の楽しみ方」[対面]
- ・12月18日「親子でふれあいクリスマス音楽会」[対面]

2023年

- ・2月21日 レクチャーコンサート「ジャズの楽しみ方講座 第6弾日本のモダン・ジャズの夜明けへ―ジョージ川口とビッグ・フォア―」[対面]

02 ジェンダー フォーラム

日本で初めて「女性学」の講座を開いたジェンダー教育の草分け的存在である和光大学において、ジェンダーに関する情報発信、イベント企画、交流活動などを行うために設置されています。ジェンダーに関する講演会や研究会、展示なども企画しています。また、学生の居場所として学内にジェンダーフリースペースを設置しています。

年度内の主な活動

2022年

- ・4月22日「地域・流域プログラム」[ジェンダー・スタディーズ・プログラム] 学内合同履修説明会 [対面]
- ・7月11日 授業内講演「ロック、ポピュラー音楽とジェンダー」[対面]
- ・11月24日 デートDV防止啓発講座「これってデートDV?」[対面] *町田市男女平等推進センターとの共催

2023年

- ・1月18日 ジェンダーフォーラム卒論発表会 [オンライン]

03 地域・流域 共生 フォーラム

大学の地元である川崎市麻生区岡上地域や鶴見川流域を舞台にした環境保全活動などを行っています。活動は、学生が自主的に展開してきたものも多く、積極的にバックアップしています。また、地域の学校などと連携した生き物観察の企画なども実施し、「環境」という切り口で大学と地域を繋げる拠点として機能しています。

年度内の主な活動

- ・児童館などでの昆虫観察会
- ・和光鶴川小学校などでの環境学習支援
- ・岡上丸山特別緑地保全地区管理活動

2022年

- ・4月22日「地域・流域プログラム」[ジェンダー・スタディーズ・プログラム] 学内合同履修説明会 [対面]
- ・6月18日「ファミリー体験学習in鶴見川」開催 [対面] *横浜川崎治水事務所川崎治水センター、特定非営利活動法人鶴見川流域ネットワークとの共催
- ・8月17日 3水スマイルラウンジ「まなびのひろば『色んな生きものに会いに行こう』」内での講演 [対面]
- ・8月21日 湘南学園中学高等学校 理科研究部 環境調査協力 [対面]
- ・10月29日、11月12日 学内 刈払機&チェーンソー安全講習会開催 [対面]

2023年

- ・1月21日 和光大学坂下どんと焼き協力 [対面]

さまざまな地域連携活動

和光大学地域連携研究センターでは、プロジェクト活動以外でも、自治体やコンソーシアムと連携し、市民活動や子ども向けの体験活動の企画などを行っています。

和光大学と周辺地域

和光大学の所在地は、登記上は東京都町田市ですが、大学の敷地内には、神奈川県川崎市との都県境があり、川崎市麻生区岡上、町田市金井ヶ丘に分かれています。

●川崎市麻生区岡上

麻生区は、川崎市の北西部に位置し、その中の岡上は、麻生区の飛び地になっています。岡上には、特別緑地保全地区「梨子ノ木緑地」や、都市型農業のモデルでもある営農団地があり、自然豊かな地域が残っています。また、川崎市無形民俗文化財に認定されている岡上川井田地区の「どんど焼き」には、和光大学も毎年参加しています。

●最寄りの施設

和光大学の最寄駅は小田急線鶴川駅（徒歩15分）です。鶴川駅前には、町田市の文化施設「和光大学ポプリホール鶴川」（和光大学のネーミングライツ）があり、文化活動が盛んに行われています。また、麻生区岡上地区唯一の川崎市立岡上小学校があり、連携交流を行っています。



岡上川井田地区のどんど焼き



岡上梨子ノ木緑地



和光大学ポプリホール鶴川

連携活動紹介

●川崎市麻生区との連携イベント

和光大学と川崎市麻生区で子ども連携事業を行っています。麻生区と和光大学の環境保全サークル『かわ道楽』と鶴見川流域ネットワークが主催となり、毎年夏に、小学生向けイベント「鶴見川流域の自然学習と生きもの観察会」を行い、好評を得ています。

●さがまちカレッジ

和光大学は、相模原・町田大学地域コンソーシアム（略称：さがまちコンソーシアム）の会員です。さがまちコンソーシアムとは、相模原市と町田市、そこを生活圏とする大学・NPO・企業・行政などが連携している組織です。このコンソーシアムで行う教育学習活動事業が「さがまちカレッジ」と呼ばれ、和光大学からも多くの市民講座を開講しています。



古代ギリシアの神話と星座



楽しく環境を学ぼう



ソックスパペットをつくらう

市民講座のほか、さがまちコンソーシアムでは、次のような活動を行っており、和光大学の学生も活動に参加しています。

さがまち 学生Club

相模原・町田地域の学生が地域の活性化など街づくりに繋がる活動を企画実施する学生主導型体験プロジェクトです。

さがまち バンバン

学生が相模原・町田の地域情報を取材し、映像作品の制作を通して地域の魅力の発見に取り組むプロジェクトです。

町田市 まこちゃん教室

町田市内に住むひとり親家庭などの子どもを対象とした学習教室で、大学生が勉強を教えたり、イベントを企画しています。

●寺子屋おかがみ（川崎市立岡上小学校）

川崎市教育委員会では、川崎市の各小学校を対象とした、地域ぐるみで子どもの教育・学習をサポートする「寺子屋」事業が行われています。麻生区の岡上小学校で行われている寺子屋事業が「寺子屋おかがみ」です。和光大学は、近隣小学校である岡上小学校の寺子屋の一員として、岡上小学校の子どもたち向けに、体験講座を開催しています。



寺子屋おかがみチラシ



玉ねぎ収穫体験



Tシャツアートイベント